The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Padārthadharmasaṃgraha とその注釈書における内属と結合の関係項（sambandhin）について

平　野　克　典

1．問題の所在　ヴァイシェーシカ学派（V学派）が説く，事物を結び付ける〈関係〉(sambandha) に内属（samavāya）と結合（saṃyoga）がある．これら異なった〈関係〉の関係項（sambandhin）は，共通した数々の術語でV学派の諸文献に言及されている．先行研究ではこれら術語の概念が十分に区別・説明されているとは言い難い[1]．本稿では，V学派の学匠 Praśastapāda（ca. 550–600）[2] の *Padārthadharmasaṃgraha*（PDhS）とその注釈書に依拠して，関係項に対する術語のうち，3つの術語「ādhāra と ādhārya」，「adhikaraṇa と adhikartavya」，「āśraya と āśrayin」に着目して，これらの用例の分析を通じて3者の概念の共通性と差異を明確にすると共に，関係項から見る内属と結合の相違を示す．

2．ādhāra と ādhārya（保持者と被保持者）　PDhS は内属の定義を「被保持者と保持者としてある離れて成立していることのない諸事物の関係であり，『ここに［これがある］』という認識の原因であるもの，それが内属である」[3] と述べる．関係項のあり方を述べた下線部「被保持者と保持者」(ādhārya-ādhāra)[4] に PDhS は詳細な説明を加えてはいないが，その現存最古の注釈書，Vyomaśiva（ca. 900–960）の *Vyomavatī*（Vy）に次のような注釈を確認できる．

> それ（空間と［飛んでいる］鳥との関係）を排除するために，「被保持者と保持者」という語が［PDhS の内属の定義にある］．また，空間は保持者でも被保持者でもない．なぜならば，下位と上位の関係［というダルマ］が［空間には］ないからである．実に，結合した諸実体[5] に下位と上位の関係があるならば，その同じ［諸実体］に保持者と被保持者の関係がある．皿とナツメ実などには［下位と上位の関係が］認められる．しかし，そ［の下位と上位の関係というダルマ］は空間にはない．なぜならば，それ（空間）は覆うものとして，鳥を覆って存在しているからである[6]．

上記引用文に関係項の2種類のあり方を確認できる．「保持者と被保持者」としてある関係項と，そうではない関係項である．そして，内属が前者に存するのに対し，結合は両者に存するとされる．V学派において，「空間と鳥との関係」，そして「皿とナツメ実との関係」は各々結合である．Vy はそれを受け入れつつ，「下

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

位と上位の関係」が認められる「皿とナツメ実」には「保持者と被保持者」が成立し，認められない「空間と鳥」には成立しないと述べる[7]．すなわち，関係項に上下という空間上の位置関係が認められるか否かに基づき，結合の関係項が「保持者と被保持者」としてあるか否かの区別がなされている[8]．

Śrīdhara（ca. 950–1000）の *Nyāyakandalī*（NK）は当該の「ādhāra と ādhārya」に直接的な注釈を加えてはいないが，内属と結合の関係項を共に「保持者と被保持者」と表現している[9]．Udayana（ca. 1050–1100）の *Kiraṇāvalī*（Kir）は，「…『被保持者と保持者としてある［諸事物］の』という語が［PDhS の内属の定義にある］．被保持者と保持者の［関係］は本来的に［生起し］，偶然的な性質によって［生起する］のではないという意味である」[10] と注釈する．つまり，内属の関係項のうち，どちらが保持者となり，どちらが被保持者となるかは事物（関係項）の本質（svabhāva）に基づくとしている．

3．adhikaraṇa と adhikartavya（基体と付属者）　PDhS の「内属の考察の章」に言及される内属と結合に関する4つの相違点の1つに，「また，それ（内属）は結合ではない．…［内属は］基体と付属者との間にのみ存するから」[11] がある．内属が「基体と付属者」としてある諸事物にのみ存するという明示は，一方の結合が基体と付属者としてある諸事物と，そうではない諸事物に存していることを暗示する．すわなち，PDhS は関係項に2種類のあり方を想定し，内属は1種類のみに，結合は2種類に成立すると考えていることになろう．さて，Vy は当該箇所に注釈を加えていないが，内属と結合の関係項を共に「基体と被保持者（付属者）」と表現している[12]．NK は以下のように注釈する．

> 結合は，独立した2つの事物の間にも存する．例えば，直立した状態にある2本の指の間に［結合が存する］．しかし，これ（内属）は基体と付属者との間にのみ存する．従って，これ（内属）は結合ではない[13]．

NK は関係項に，独立した諸事物と，基体と付属者としてある諸事物の2種類を示す[14]．内属が後者にのみ成立するのに対して，結合は両者に成立するとしている．「独立した諸事物（関係項）」の例に，直立・垂直の状態にある密着した2本の指を NK は挙げる．垂直であるが故に，左右に並ぶ二指のどちらが「上に置くもの（基体）」で，どちらが「上に置かれるべきもの（付属者）」とは言えない[15]．つまり，結合の関係項に対する基体と付属者の決定には，上下という空間上の位置関係が介在しているのである．一方，基体と付属者としてある結合の関係項の例に，皿とナツメ実や，重層状態にある2本の指などがある．両例の関係項はど

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ちらが基体で，どちらが付属者かを決定する空間上の上下関係が明確である．なお，Kir は同章の注釈部分を欠いており確認できない．

4．āśraya と āśrayin（拠り所と拠るもの）　PDhS は「内属の考察の章」で，

> 瓶と凝乳の結合は1つであっても，拠り所と拠るものとの関係（āśraya-āśrayi-bhāva）は決定している．そのように，実体性などにおいても，内属は1つであっても被顕示者と顕示者の潜在力の相違に基づいて，保持者と被保持者（ādhāra-ādheya）は決定している[16]．

と述べ，結合の関係項を「拠り所と拠るもの」とし，内属の関係項を「保持者と被保持者」と区別しているが，PDhS 全体では，その注釈書も同様に，内属と結合の関係項が共に「拠り所と拠るもの」と言及されている[17]．また，PDhS とその注釈書は，関係項が上下という位置関係にあるか否かによって，結合の関係項を「拠り所と拠るもの」としてある場合と，そうではない場合とに区別していない．例えば，PDhS は「知覚されるべき保持者（ādhāra）に内属している存在性，実体性，属性性，運動性などは，［存在性などの］拠り所（āśraya）を捉える諸々の感官によって捉えられる．以上が我々などの直接知覚である」[18] と述べる．当該の「拠り所」は存在性を拠るものとする一方で，感官も拠るものとしている．結合によって結ばれる感官とその対象（［存在性などの］拠り所）には空間上の上下関係を指摘できないが，「拠り所と拠るもの」と理解されている．

一方，内属の場合，関係項の上下の位置関係ではなく，「被顕示者と顕示者の潜在力の相違」に基づき「保持者（基体，拠り所）と被保持者（付属者，拠るもの）」が決定される．簡潔に言えば，牛には牛性を顕示する潜在力があるため，牛（保持者）にのみ牛性（被保持者）は存することになる．牛は牛性を保持者とすることはない．そうした組み合わせは先の Kir が言う「事物の本質」に基づく．換言すれば，V 学派の体系によって決定されているものである．

5．結論　V 学派が説く内属と結合の関係項に対する3つの術語を PDhS とその注釈書に依拠して考察した．共通点として，(1) PDhS は「基体と付属者としてある関係項と，そうではない関係項」，Vy は「保持者と被保持者としてある関係項と，そうではない関係項」，NK は「基体と付属者としてある関係項と，独立した関係項」と述べている．つまり，術語は異なっているが，各々関係項のあり方に2種類を想定する．(2) 内属は3つの術語で言及される関係項に存する．(3) 結合は3つの術語で言及される関係項と，そうではない関係項に存する．Vy と NK によれば，関係項に空間上の上下という位置関係が指摘できれば，そ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の関係項は「保持者と被保持者」あるいは「基体と付属者」と呼ばれる．しかし，「拠り所と拠るもの」の場合は，その限りではない．従って，結合の関係項に関していえば，概念上の類似点から，「基体」と「保持者」，「付属者」と「被保持者」は同値と見なすことが可能となる．そして，「拠り所と拠るもの」は「保持者と被保持者」や「基体と付属者」よりも，広範な関係項のあり方を指示しているといえよう．

最後に，内属と結合の関係項は共通した術語をもって示されるが，関係項のあり方は異なっている．その異なりは，両〈関係〉の相違点を表すと共に，同一の言葉（術語）が必ずしも同一の世界構造（関係項のあり方）を指示しているわけではないことを示唆している．

1）Halbfass［1993（1992）: 97］は āśraya と dharmin との概念上の相違を述べている．

2）論師の年代は Potter（ed.）［1995（1977）: 9–12］に基づく．　3）PDhS, no. 9: ayutasiddhānām ādhāryādhārabhūtānāṃ yaḥ sambandha ihapratyayahetuḥ sa samavāyaḥ. PDhS の内属の定義に関しては，平野［2014: 134］参照．　4）ādhāra（保持するもの，保持者）と ādhārya（保持されるべきもの，被保持者）は，to hold, keep, support を意味する ā-√dhṛ から派生している．また，PDhS では ādhāra-ādheya という組み合わせも見られる．ādheya（上に置かれるべきもの，保持されるべきもの，被保持者）は，to place on, keep, possess を意味する ā-√dhā の Gerundive である．ādhārya-ādhāra の訳語に関しては，金倉［1971: 101; 232］は「保たれる物と保つ物」「所持と能持」，中村［1979: 165; 308］は「所持（たもたれるもの）と能持（たもつもの）」「保持されるものと保持する基体」，宮元［2008: 9; 195］は「保たれるものと保つもの」「拠るものと拠られるもの」，Jhā［1982（1915）: 32］は "the container and the contained" としている．　5）「有形なる実体」（mūrtadravya）を意味すると思われる「結合した諸実体」という語によって，下線部の条件文が，遍在する実体や，実体以外を関係項とする内属には適用されないことになる．　6）Vy, vol. I, 25,15–18: tadvyavacchedārtham ādhāryādhāragrahaṇam. na cākāśasyādhāratvam ādheyatvaṃ vā, adharottarabhāvasyābhāvāt. <u>yatra hi saṃyogidravyeṣv adharottarabhāvas tatraivādhārādheyabhāvaḥ</u> kuṇḍabadarādāv upalabdhas tadabhāvaś cākāśe, tasya vyāpakatvena śakuniṃ vyāpya sadbhāvāt. Hirano［2012: 71］参照．　7）ジャイナ教の Prabhācandra（ca. 990–1020）の論書 *Prameyakamalamārtaṇḍa* の内属批判の箇所に言及されているヴァイシェーシカ説に同様な議論を確認できる．「『この空間に鳥がいる』という認識の原因である結合による逸脱はない．『被保持者と保持者としてある［諸事物には］』と述べられているからである．空間は覆うもの故に，まさに鳥の下位にあることはなく，上位にあることもないからである」（p. 604,16–18: nāpi 'ihākāśe śakuniḥ' iti pratyayahetunā saṃyogena, 'ādhārādheyabhūtānām' ity ukteḥ. na hy ākāśasya vyāpitvenādhastād eva bhāvo 'sti śakuner uparyapi bhāvāt.）　8）有形なる実体のみを対象として生じる「上下」という認識は方角（diś）を原因とする．PDhS, no. 73 参照．　9）NK, 14,24–25: ādhāryā-

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

dhārabhūtānām ihapratyayahetur iti kuṇḍabadarasambandho na vyavacchidyate tadartham ayutasiddhānām iti. Hirano [2012: 93] 参照.　10) Kir, 18,8–9: ... ādhāryādhārabhūtānām iti. svabhāvata ādhāryādhārāṇāṃ na tv āgantukena dharmeṇety arthaḥ. Hirano [2012: 106, n. 11] 参照.　11) PDhS, no. 375: na cāsau saṃyogaḥ, sambandhinām ayutasiddhatvād, anyatarakarmādinimittā sambhavād, vibhāgāntatvādarśanād, adhikaraṇādhikartavyayor eva bhāvād iti. PDhS において adhikaraṇa と adhikartavya の語はこの箇所のみに確認できる．訳語に関しては，金倉 [1971: 232] は「基体とそれに関係づけられるべきもの」，中村 [1979: 309] は「拠所と拠所に保持されるもの」，宮元 [2008: 197] は「拠られるものと拠るべきもの」，Jhā [1982 (1915): 677] は "the container and the contained" としている．また D. N. Shastri [1976 (1964): 383, n. 14] 参照.　12)「『ここに』とは基体であり，『これが』とは被保持者である．両者の関係（結び付き）なしには『ここにこれが［ある］』という認識は生じない」(Vy, vol. II, 289,18–19: iha ity adhikaraṇam, idam ity ādheyam, tayoḥ sambandhaṃ vinā ihedam buddhir na bhavatīti.) ここでは基体の対概念が付属者ではなく，被保持者となっている．adhikartavya は，to place at the head, appoint を意味する adhi-√kṛ の Gerundive であり，ādheya は to place on, keep, possess を意味する ā-√dhā の Gerundive である．共に直訳は「上に置かれるべきもの」となり，Vy では同値とみなされていると思われる．また，「『ここに［これがある］』という認識」は結合も原因となるため，結合の関係項も「基体と被保持者」と考えることができよう．PDhS, no. 374: yatheha kuṇḍe dadhīti pratyayaḥ sambandhe sati dṛṣṭas, ... および，平野 [2014: 128–130] 参照.　13) NK, 326,10–11: saṃyogaḥ svatantrayor api bhavati yathordhvāvasthitayor aṅgulyoḥ ayaṃ tv adhikaraṇādhikartavyayor eva bhavati tasmān nāyaṃ saṃyogaḥ. ...　14) 前述の PDhS に結合が「基体と付属者としてはない事物」に存していることを読み取ったが，それが NK では「独立した事物」(svatantra) と明示されている.　15) この点については，B. Shastri [1993: 151] 参照.　16) PDhS, no. 381: yathā kuṇḍadadhnoḥ saṃyogaikatve bhavaty āśrayāśrayibhāvaniyamas tathā dravyatvādīnām api samavāyaikatve 'pi vyaṅgyavyañjakaśaktibhedād ādhārādheyaniyama iti. āśraya-āśrayin の訳語に関しては，金倉 [1971: 233–34] は「所依と能依」，中村 [1979: 310] は「基体とその基体に依存せるもの」，宮元 [2008: 199] は「拠られるものと拠るもの」，Jhā [1982 (1915): 680] は "the container and the contained" としている.　17) 内属の関係項が「拠り所と拠るもの」と示される根拠は，PDhS, no. 381: tvagindriyaśarīrayoḥ ... yuteṣv āśrayeṣu samavāyo 'stīti. ... なお PDhS では結合の関係項は「保持者と被保持者」という語をもって言及されていない.　18) PDhS, no. 240: bhāvadravyatvaguṇatvakarmatvādīnām upalabhyādhārasamavetānām āśrayagrāhakair indriyair grahaṇam ity etad asmadādīnāṃ pratyakṣam. この箇所に対する注釈は，Vy, vol. II, 143,10–11; NK, 195,7–8, Kir, 188,23–189,10 参照.

[一次文献]　**Kir** of Udayana, in *Praśastapādabhāṣyam with the Commentary Kiraṇāvalī of Udayanācārya*, ed. Jitendra S. Jetly, Gaekwad's Oriental Series 154, Vadodara: Oriental Institute, Reprint, 1991. **NK** of Śrīdhara, in *The Praśastapāda Bhāshya* with Commentary *Nyāyakandalī* of Śrīdhara, ed. Vindhyesvari Prasad Dvivedin, 2nd ed., Sri Garib Dass Oriental Series 13, Delhi: Sri

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Satguru Publications, 1984. **PDhS** of Praśastapāda, in *Word Index to the Praśastapādabhāṣya*, ed. Johannes Bronkhorst and Yves Ramseier, Delhi: Motilal Banarsidass, 1994. ***Prameyakamalamārtaṇḍa*** of Prabhācandra, in *Prameyakamala-Martaṇḍa* by Shri Prabha Chandra, edited with a commentary on Shri Manik Nandi's *Pareeksha Mukh Sūtra* and introduction, indexes etc. by Mahendra Kumar Shastri, 3rd ed., Sri Garib Dass Oriental Series 94, Delhi: Sri Satguru Publications, 1990. **Vy** of Vyomaśiva, in *Vyomavatī of Vyomaśivācārya*, ed. Gaurinath Sastri, 2 vols., Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, 1983, 1984.［二次文献］ **Halbfass**, Willhelm 1993 (1992), *On Being and What There Is*, 1st Indian ed., Sri Garib Dass Oriental Series 168, Delhi: Sri Satguru Publications. **Hirano** Katsunori 2012, *Nyāya-Vaiśeṣika Philosophy and Text Science*, Delhi: Motilal Banarsidass. **Jhā**, Gaṅgānātha 1982 (1915), *Padārthadharmasaṅgraha of Praśastapāda, with the Nyāyakandalī of Śrīdhara (English Translation)*, Chaukhambha Oriental Studies 4, Reprint, Varanasi: Chaukhambha Orientalia. **Potter**, Karl H. (ed.) 1995 (1977), *Encyclopedia of Indian Philosophies*, vol. II, *Indian Metaphysics and Epistemology: The Tradition of Nyāya-Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa*, Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass. **Shastri, Biswanarayan** 1993, *Samavāya Foundation of Nyāya-Vaiśeṣika Philosophy*, Delhi: Sharada Publishing House. **Shastri, Dharmendra Nath** 1976 (1964), *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and Its Conflict with the Buddhist Dignāga School: Critique of Indian Realism*, Reprint, Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan. **平野**克典 2014「古典ヴァイシェーシカ学派の〈関係〉概念の研究，『ヴィヨーマヴァティー』の「内属関係の定義の章」の翻訳と訳注(2)」『東海佛教』59, pp. 136(17)–123(30). **金倉**圓照 1971『インドの自然哲学』平楽寺書店. **宮元**啓一 2008『インドの「多元論哲学」を読む——プラシャスタパーダ『パダールタダルマ・サングラハ』』春秋社. **中村**元 1979「ヴァイシェーシカ学派の原典，第二部パダールタ・ダルマ・サングラハ」『三康文化研究所年報』10–11 号，pp. 157–316.

（本研究は，科学研究費補助金［基盤研究（C)］課題番号 25370061「〈関係〉概念に基づくヴァイシェーシカ学派の存在論の再評価」（研究代表者：平野克典）の成果の一部である.）

〈キーワード〉 samavāya, saṃyoga, ādhāra, adhikaraṇa, āśraya

（愛知学院大学非常勤講師，博士（文学））

NII-Electronic Library Service